

テレメトリー法によるフクロウの行動調査

○阿部 學 (NPO ラプタージャパン：日本猛禽類研究機構)・荒川茂樹 (東京電力(株))・
水越利春 (東電環境エンジニアリング(株))・櫻井良樹 ((株)当間高原リゾート)

これまで夜行性のフクロウの行動圏を知る方法として、鳴き声を用いられてきた。しかし、この手法は非繁殖期には通用しない。そこで、年間を通してフクロウの行動圏を知る方法としてテレメトリー法を採用した。

調査対象としたフクロウは、新潟県十日町市の当間高原リゾート内で繁殖しているAとBの2つがいである。調査地内には樹洞を持つ大径木が少ないところから、60年生のスギ林内に人工の巣箱を架設し、そこで繁殖した一つがいのフクロウを用いた(Aつがい)。もう一つがいは南に約1km下ったサワグルミの樹洞に営巣していた(Bつがい)。小型発信器は144MHz帯で重量は10g前後で、ハーネス式を採用した。何れのつがいも雌個体に発信器を装着した。

繁殖期の雌は、抱卵行動と育雛活動にほとんどの時間を費やすが、雛の巣立ちとともに徐々に行動圏を広げていく。すなわち、抱卵中はもっぱら巣内に留まるが、雛の巣立ち後1ヶ月前後は巣立ち幼鳥を天敵から守るためか、営巣林内に留まることが多いが、その後は1km程度離れた樹林や屋敷林へ採餌に出かけるようになる。

7月のねぐら入り時刻は4時30分前後で、明るさはその日の天候に左右され、30~2,300Luxであった。このころは丁度カラスが鳴き始める時刻と合致していた。一方、ねぐらから出る時刻は、18時40分前後で、明るさは30~230Luxであった。この結果から、フクロウは明るさでねぐらの出入りを決めているのではなく、体内時計に左右されているようである。

フクロウの行動圏は約4km²で、夏期はその中を万遍なく使っているが、冬季になると人里に偏った行動圏となる。十日町は全国でも有数の豪雪地帯であるところから、冬季は一面が2~3mの豪雪に埋もれてしまう。従って、フクロウが主食としているノネズミ類の捕獲が困難になるらしくもっぱら人里で採餌活動を展開するようになる。

Bつがいの雌は、巣から1.5kmほど降りた国道に沿って点在する集落の孤立林や信濃川の小さな河畔林で採餌していた。

夜間はその多くの時間を採餌に費やしていると思われるが、1個所に一晩中滞在する傾向が強かった。夜間、移動しても2~3個所であった。

ねぐら林の特徴は、面積1ha以上の連続する樹林地を選択する事例が多く、防風林のような見通しの良い幅の狭い樹林地や孤立木は選択しなかった。